

グライターの宇宙・建築

第4回 (最終回)

原題：“Gleitors Universum・Architektur”

原著 Jörg Gleiter (ベルリン工科大学教授)

翻訳 田中 辰明 (お茶の水女子大学名誉教授・工学博士)

DEJAVU Gesellschaft für Fotografie und Wahrnehmung e.V.

持続可能性(NACHHALTIG)

持続可能性というテーマについて議論すると、往々にして一定の倦怠感が生じる。持続可能性もまた、不都合な真実と結びついた多くの概念と同様の運命を辿っている。こうした概念はしばしば流行語化され、軽視されやすくなる。その結果、これらの言葉は、表面が擦り切れて元の刻印が判別できなくなった古い硬貨のように、その意味やインスピレーションを失い、単なる金属片となる。しかし、それでもなお代替不可能であり続けるのだ。持続可能性もまた、そのような言葉の一つであり、人類を救うという壮大な期待を背負わされているが、イデオロギー的に歪められ、救世主的な期待やプロテスタント的な禁欲主義と結びつけられることで、本来の意味を失ってしまっている。奇妙なことに、この言葉には「誤った中に正しいものがある」ような性質が宿っている。

疑わしい前提(Zwifelhafte Prämissen)

持続可能性には欠けているものがある。それは、批判的な理論である。まず、この理論は、持続可能性に付着したイデオロギーの硬直や表面の光沢を取り除き、その内容を明らかにする必要がある。その上で、偏見や理想化、疑わしい前提を玉ねぎの皮を剥がすように取り除き、持続可能性や建築が文化的実践として人間にふさわしい、住みやすい環境を作り出すための人間学的基盤にたどり着かなければならない。

この不確実性が、測定可能で、数量化でき、経済化できるものに依拠し、安全性を求める傾向を助長している。こうして、持続可能性という言葉は、エコシステムのサービス、費用対効果分析、認証といった単なる空虚な器と化してしまった。それにはまた、反射的に「節約」を求める声も含まれる。誰もが説明不要で自明であるかのように思えるが、それこそがイデオロギーの疑いを招く原因となっている。

データや意見に頼る代わりに、基本的なこと、すなわ

ち人間学的な原理に焦点を当てるべきだ。「なぜ反射的に節約を求めるのか？」という問いがここに生じる。持続可能性とは、本来、ある物事への情熱がエネルギーを使い果たす形での喜びにあり、その喜びが人間に活力を与え、物事への感情的な結びつきを促し、それを通じて人間が世界や自分との関係を改めて確認するものではないのか。

象徴的な消耗(Symbolische Verausgabung)

ジョルジュ・バタイユ(Georges Bataille(1897- 1962))の「消耗」という概念に着目することができる。バタイユは『経済の廃止』において、功利性や目的志向に対して「象徴的な消耗」を提唱した。彼によれば、エネルギーの余剰とその一見「非生産的な消耗」が生命を駆動する原動力であるという。バタイユは、エネルギー余剰の扱い方に、文化の隠れた本質を解き明かす鍵があると考えた。

バタイユにとって、象徴的な消耗は芸術や音楽、舞踊、そして建築の基本原則であった。それは大規模な象徴的建築だけでなく、住宅建築にも当てはまる。家を作る行為は、建築に関わる人々のエネルギー余剰とその共同的な消耗に始まる。すべてをそうすることも、別の方法で行うことも可能な状況において、建築家はエネルギーの余剰を使い果たし、それに応じた余剰の形を持つ。その両者が建築という創造的行為の基盤となるのだ。

永久性について(Permanenz)

持続可能性の概念にはパラドックス^{訳注1)}が含まれており、それは「節約」ではなく「浪費」、すなわちエネルギーの過剰さが根本的な原動力として織り込まれていることである。このことは、ハンス・シャローン(Hans Scharoun(1893- 1972))が設計したベルリン・フィルハーモニー、さらにヴェネツィアのルネサンス宮殿、ケルン大聖堂といった壮大な建築物において顕著であるが、個々の住宅といったより小規模な建築にも同様に当てはまる。それらが持続可能であるのは、余剰エネルギーを儀式的に消

費する場として機能しているからである。

ここに、アルド・ロッシ(Aldo Rossi(1931-1997))が1966年に著書『都市の建築』で建築理論に導入した「永久性」という概念の基盤がある。この概念は大いに注目を集めたが、常に懐疑的な目で見られてきた。しかし、永久性とは持続可能性の別の表現にすぎない。その象徴的な例として、ロッシはパドヴァのラジョーネ宮殿^{※2)}を挙げている。この宮殿は、1172年から1219年にかけて莫大な労力を費やして建設され、その後の数世紀にわたりたびたび拡張・改築された。当初からその大きさ、高さ、堅牢さ、そして建設費用のすべてが過剰であったが、これによりパドヴァの住民が持つ余剰エネルギーは吸収され、生産的に変換された。この建物は用途の変化に対応しつつも、日常的な儀式を通じた占有によって一貫性を保った。

ロッシにとって永久性とは、構造の開放性による機能であり、細分化された機能の最適化とは対極に位置するものであった。持続可能性とは、未知の未来に対して見かけ上の過剰を伴う新たな占有の可能性、ひいては永続性を生み出すものである。ロッシはまた、日常生活の儀式性について言及し、その基礎としてヌマ・ドニ・フステル・ド・クーランジュ(Numa denis Fustel de Coulanges(1830-1889))の『古代国家』を引用した。クーランジュは永久性の基盤として「建築記念物、儀式、神話の統一性」を説いた。ロッシ自身も、建物の構造、日常生活の儀式、記憶価値の統一性を強調した。

持続可能性を問う中心的なテーマは、余剰エネルギーに関する問いである。この余剰エネルギーこそが持続可能性の原理の根本にある。建築の持続可能性に関する批判的理論は、この余剰エネルギーを生産的に転用し、他の実践や儀式へと導くこと、つまり人生の充実を図る方向で生かすこと、あるいはジークムント・フロイト(Sigmund Freud(1856-1939))の言う「昇華」によるものとすべきだ。余剰エネルギーの価値転換は、未来における大きな社会的課題となるであろう。

参考文献：

1. Georges Bataille, Die Aufhebung der Ökonomie [1967], übers. v. Traugott König u. a., München : Matthes & Seitz 2001. s. 15.
2. Ebd., S. 38.
3. Numa Denis Fustel de Coulanges. Der antike Staat. Slua : t iiber Kultus, Recht und Einrichtungen Griechenlands und R [1864], übers. v. Paul Weiss, Graz : Akademische Druck. Verlagsanstalt 1961.
4. Aldo Rossi, Die Architektur der Stadt. Skizze zu einer gra r. legenden Theorie des Urbanen [1966], übers. v.

Arianna Giachi, Basel : Birkhäuser 2015, S. 16.

移行儀礼(ÜBERGANGSRITEN)

21世紀は、その時代を象徴する出来事を迎えた。この出来事は物事の秩序を覆し、時代のモデルとともに私たち自身の立ち位置を揺るがした。パンデミックによる衝撃で世界は一瞬凍りつき、完全な崩壊を防いだ。私たちは、時に時間が逆行するかのように感じる極端な時間圧縮を体験している。社会学者ブルーノ・ラトゥール(Bruno Latour(1947-2022))は挑発的な意図でこう主張した。「私たちは一度も近代的事であったことがない」。しかし、もしかすると、私たちは今こそ近代に一つの可能性を与えようとしているのかもしれない。数十億人へのワクチン接種は、これまでにない集団的出来事の一環であり、大規模な儀式であり、全ての重要な儀式と同様に移行儀礼でもある。

通過儀礼(Les rites de passage)

一度この考えを抱くと、忘れることができない。現在の時代とその現象が、人間が自己や世界との新たな関係に入る出来事の一部であるということである。新型コロナウイルスの影響で、内と外、私的空間と公的空間、仕事と余暇といった日常の儀式が中断された。それらは、分離の儀式と同時に、統一の儀式でもある。都市の門、入口の柱、戸口、アーチなど、しきい(閾)は「二つの世界の間」に位置している。アルノルド・ヴァン・ジェネップ(Anthropologen rno ld van Gennep(1873-1957))によれば、空間以上に、そこでは生命と建築が深く結びついており、それらが生命に構造とリズムを与えている。ヴァン・ジェネップの関心は比喩としての建築ではなく、具体的な建築に向けられていた。彼は伝統的な社会におけるしきいが不透明であり、儀礼が儀式的かつ神聖である様子を描写した。これらの社会では、空間内で行われる儀礼が優勢であり、しきいを超える儀式は困難で、生活に深い切り込みをもたらす。

近代と移行儀礼

社会が発展するにつれて、ヴァン・ジェネップは「部屋の壁が薄くなり、コミュニケーションの扉がより広く開かれる」ことを観察した。近代は、空間の儀礼的機能が弱まり、しきいを超える儀式が容易になることで特徴づけられる。そして、壁が薄いほど、社会は開かれたも

のになる。物質性と支配形態の結びつきは暗示的であり、特に近代建築において多くの疑問を投げかける。

ロックダウンや大規模なワクチン接種によって、集団的儀礼が再び公共の場に戻り、長らく近代が人々に欠如させていたものを取り戻した。それは、文化や娯楽産業が代替的に提供していた儀式では満たしきれないものである。

歴史的变化のしきい

アルノルド・ヴァン・ジェネップの1909年の著作『移行儀礼 (Les rites de passage)』は、儀式がアイデンティティや共同体を形成する機能について詳述している。彼は「半文明的社会」の例を挙げたが、それは自身の時代にも適用可能であった。建築はヴァン・ジェネップにとって、主に儀式を形成する文化技術であり、空間を形成する機能を上回るものであった。

彼は社会を部屋や廊下に分かれた家に例えた。それぞれの空間には儀式が存在し、特に移行が行われるしきいで顕著である。しきいの儀式は、魔術的・宗教的、または社会的状況を次の状況に移行させる。

しきいの儀式は歴史を変える。それは歴史を中断し、その秩序に介入することで歴史を作り出す。

参考文献：

1. Bruno Latour, We have never been modern, übers. v. Catherine Porter. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press 1993.
2. Arnold van Gennep, Übergangsriten (Les rites de passage), Frankfurt/M. u. a. : Campus 1986, S. 34.
3. Ebd., S. 34.
4. Ebd., S. 28.
5. Ebd., S. 27.
6. Ebd., S. 34.
7. Norbert Elias zitiert nach: Markus S. Schulz, «Introduction: Global Sociology and the Struggles for a Better World», in: Global Sociology and the Struggles for a Better World, hrsg. v. Markus S. Schulz. Los Angeles u. a. : SAGE Publishing, 2019.
8. Theodor W. Adorno, «Kulturkritik und Gesellschaft», in: Ders., Gesammelte Schriften in 20(23) Bänden, Bd. 10.1. Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1998, S. 30.

理論 (THEORIE)

ある問いが浮かび上がる。建築理論は何のために必要なのか。そしてそもそも、建築理論とは一体何なのか。この問いはよく問われる正当なものであり、特にある哲学教授が少し前に次のように挑発的に述べたことを考え

ると、ますます重要である。「理論の不足は必ずしも欠点ではない。全ての物事や分野に理論が必要というわけではない。」

この発言は建築理論にあまり良い印象を与えない。しかし、彼の言葉には一理あるかもしれない。近年、建築がかつてないほど盛んに行われているにもかかわらず、理論的な方向性が失われているように見える。このことは、「connectedness^{訳注3}」「entanglement^{訳注4}」「Chthucene^{訳注5}」といった、詩的かつ比喩的な響きを持つ新しい概念が次々と生まれては消えていくことにも表れている。

対象と理論 (Gegenstand und Theorie)

建築に理論が欠かせないのは、その本質が人工物であるからだ。建築は「人の手による構造物」であり、自然に存在するものではなく、常に人間によって作られたものである。人間は、個人として、また政治的共同体として自らを維持するために、変化する必要と変わらない必要の両方を満たす環境を建築を通じて創造してきた。人間の存在は「物質性と客観性」に依存しており、それが彼の存在の基盤となっている。

ハンナ・アーレントによれば、物の世界は「自然の中で生まれながらにして故郷を持たない」人間の生活の場である。人間は、自らの生存の基盤を自ら生み出す必要があり、そのためには道具、機械、制度(議会、団体、家族など)を作り出す必要がある。建築もまたそのような制度や道具の一つであり、人間の生活を可能にするものである。

建築が作られるとき、それは建物をどのように建てるか、どのような手段で、どのような目的のために建てるかといった理論的なモデルや原則に基づいている。建築家は建築を行う際、必ず物質、形態、共同体に関する思考モデルを無意識にでも参照している。それらは行動の出発点となり、建築家の手による創造を支えている。

理論と実践 (Theorie und Praxis)

歴史を振り返ることで、この関係を理解することがができる。アリストテレス (Aristoteles (紀元前384-322)) は、「建築能力とは理性と結びついた技術と習慣である」と述べている。建築物は常に理性、つまり理論によって設計された人工物であり、建築の使用もまた既存のモデルやスキーマ^{訳注6}に従う。それは人間の行動を構造化する大小さまざまな意識的・無意識的な儀式に基づいて

いる。

したがって、建築は常に理論的な対象である。以下のような理論の4つの基本的な性質を挙げることができる。

1. 理性と結びついた習慣として、理論は実践を目指している。物質世界がその物質性において実践による支配に抵抗する場合、実践は理論に影響を与え、理論を反省的なものにする。理論と実践は相互作用的な関係にある。
2. 実践を目指す理論は未来志向的である。建築が理性によって生み出されるものである以上、理論は建築そのものの可能性の条件となる。
3. 理論は創造性の源である。建築における創造性は理論に導かれたものとして本質的に現れる。
4. 実践が理論形成を促す。設計プロセスは理論形成プロセスであり、偉大な建築家は同時に優れた理論家でもある。

実践と科学(Praxis und Wissenschaft)

理論には「実践としての理論」と「科学としての理論」があることを区別しなければならない。実践としての理論は暗黙の知識や「経験的知識」として存在することが多い。一方、科学としての理論は、理論的知識を具体的な建築行為に移行させることを目指す。

理論はアイデアが物質や形態の中に感覚的に現れることに焦点を当てており、それによって理論は論理的で認識的であるだけでなく、感覚的で美的であることが示される。建築が人間にとってどれほど適切であるかを問う場合、理論は人類学的視点を持つ。建築理論の反省的な3つの次元として、認識論、美学、人類学が挙げられる。

感情移入(EINFÜHLUNG)

人々は「感情移入」という言葉に憤りを覚えるかもしれない。「感情移入なんて、もうとうの昔に超えた概念ではないか」と。しかし、実際には19世紀末に心理学や実験生理学という新しい科学の文脈で感情移入がテーマとして浮上した。この感情移入理論は、18世紀のヨハン・カスパー・ラヴァーター(Johann Caspar Lavater(1741-1801))の顔貌論^{訳注7)}に基づき、さらにその起源を古代の汎神論的動機付けによる擬人主義^{訳注8)}に遡る。こうした歴史の流れは、感情移入が基本的な概念であることを示唆している。近年、この概念は変容した形で議論に再登場しており、その核心は依然として変わらない点で

も、基本的な概念であることを裏付けている。今日、感情移入が元の肯定的な美学的構想を反転させた否定的な美学的な形で影響力を持っている事実は、建築やその理論の基盤に批判的な視点を投げかけている。

身体的組織化(Leibliche Organisation)

感情移入理論は、近代への過渡期に特有の現象であることに疑問の余地はほとんどない。それは近代がその美学^{訳注9)}的構想を明確化するための触媒としての機能を果たした。変化する世界の中で、感情移入を手がかりに人間と物、そして自己との関係が問われた。この理論は、歴史的な転換点と結びついており、建築理論はそれ以前と以後でまったく異なるものになった。

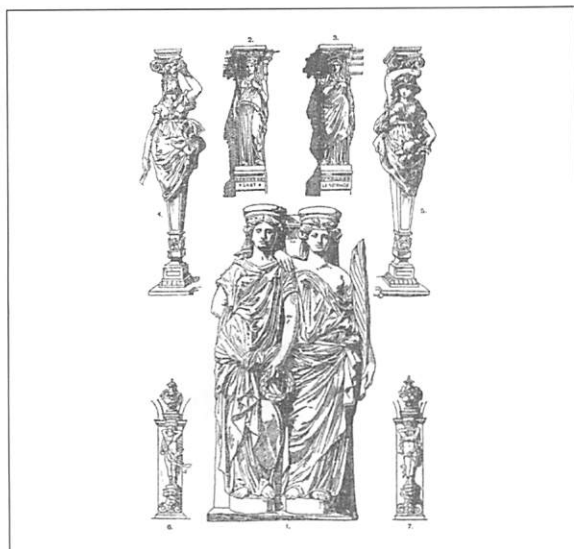
ローベルト・フィッシャー(Robert Vischer(1847-1933))は、1873年に感情移入を美学理論に導入し、「自身の身体形状と魂を無意識に対象物の形状に置き換えること」と定義した。この理論に基づき、ハインリッヒ・ヴェルフリン(Heinrich Wölfflin(1864-1945))は1886年の『建築心理学の予備研究』において、「建築的形態がどのようにして感情や気分の表現となりうるのか」と問いかけた。その後、ヴィルヘルム・ヴォリンガー(Wilhelm Worringer(1881-1965))は、感情移入に抽象化の視点を追加することで、美学理論を一般的な文化理論へと拡張した。

身体運動と感覚(Beseelung)

ヴェルフリンは、感情移入の中心に人間の身体運動(Physiomotorik)があると考え、それを物の表現の本質的な要素として認識した。彼は、視覚が単なる物のイメージ的な表象や観念ではなく、常に身体運動的な緊張を引き起こすことを明らかにした。我々が身体的に物事を把握する形態は「我々の身体的な組織化」に基づく。

物の擬人化と生命化

感覚は観察者の「自己経験」に基づいている。重量や圧力、質量や体積、垂直性や水平性、比例や装飾は、身体を通じて人間が得た経験によって規定される。ヴェルフリンは次のような例を挙げている。「私たちは物を持ち上げたり、押し下げる経験から、それがどのように重みを感じさせるかを知っている。倒れることや体重に屈する感覚を経験したからこそ、柱が持つ堂々とした美しさを理解し、物質が地面に広がろうとする力を感じ取るのである。」これは感傷的に聞こえるが、彼は「我々は無意



オーナメント形式論からの「カヤティーン」

識のうちにあらゆる物を擬人化する」と主張した。

抽象化と感情移入の限界 (Abstraktion)

感情移入は建築の現象の一部しか説明できないという限界もある。例えば、ピラミッドのような「死んだ形」やビザンチンのモザイクには、感情移入することが難しい。ここでヴォリンガーは1908年、『抽象化と感情移入』の中で、有機的な感情移入衝動に対して無機的な抽象化衝動を対置した。

近代建築の白いフォルムや鋭角的な形態は、感情移入を拒絶するものであった。ヴォリンガーはこれを、人間の不安感が引き起こす抽象化衝動の結果と見なし、それが感情移入の衝動に真っ向から対抗するものであるとした。

感情移入と抽象化は相互に排他的ではなく、それぞれ異なる形で交差している。たとえばニューヨークの「56 レナードストリート」やバンコクの「マハナコンタワー」のような高層建築では、抽象的な幾何学形態が感情移入の逆転を引き起こし、観察者を強い身体的緊張感にさらす。これらの建築は、感情移入の否定的な形での再解釈を表現しているのだ。

参考文献：

1. Robert Vischer,『Über das optische Formgefühl』1873. a. a. O., S. 39.
2. Heinrich Wölfflin,『Prolegomena zu einer Psychologie der Architektur』[1886]. a. a. O., S. 71.
3. Ebd., S. 79

4. Ebd., S. 73
5. Ebd., S. 79
6. Ebd., S. 73
7. Ebd., S. 74
8. Robert Vischer,『Über das optische Formgefühl』[18-31. a. a. O., S. 57.
9. Wilhelm Worringer,『Abstraktion und Einfühlung. Ein Beitrag zur Stilpsychologie』[1908]. a. a. O. S. 130
10. Ebd., S. 131
11. Ebd., S. 124
12. Ebd., S. 131
13. Ebd., S. 134

環境たち (UMWELTEN)

環境という概念は今や流行の最中にある。しかし、「環境とは何か」、そして「いくつの環境が存在するのか」という問いが生じる。エコロジーの創始者であるヤーコプ・ヨハン・フォン・ウクスキュル(Johann Caspar Lavater (1864-1944))によれば、生物はそれぞれ独自の環境を持っている。そして人間の環境はその一つに過ぎない。これは、創造物語におけるすべての生命の統一性という概念と対立する。しかし「すべての生物に共通の時間と空間」は存在しない。

したがって環境政策の前提として、まず多様な環境の存在を認めることが求められる。同時に、生物だけでなく、人工物一物、建物、都市、人工知能—もまた独自の環境を形成するという認識が必要だ。

環境

「環境」という単一の概念について語ることの問題点を、ウクスキュルはダニを例に挙げて説明した。彼は1934年に著した『動物と人間の環境をめぐる探訪』において、ダニが人間にとって美しい景観の中に生息し、自然と人間の調和を乱すと指摘した。しかし、それはダニの意図的な行動ではない。なぜなら、ダニには美を感じる感覚がなく、人間が自然を風景へと変換したような視点を持たないからだ。

ダニは独自の環境に生きている。その感覚器官は、彼らを三つの刺激にのみ敏感かつ反応可能にする。一つは哺乳類が発する酪酸の匂い、二つ目はその体温、三つ目は皮膚の特性だ。この三つだけがダニの環境を構成する。哺乳類がダニの下を通過し、最初の二つの刺激が合わさると、ダニは長い間待ち構えていた枝から瞬時に飛び降り、皮膚に噛みつき、血を吸う。

ダニの環境がいかに狭いかは、血液と他の液体を区別

できない点からも明らかだ。哺乳類の体にたどり着いた後は温度に従って行動するが、それが水であろうとガソリンであろうと、それを識別する感覚はない。つまり、動物の環境を構成するのは、その感知能力のみである。このことは、人間にも当てはまり、フリードリヒ・ニーチェ(Friedrich Nietzsche(1844-1900))が「まだ確立されていない動物」と呼んだ存在にも該当する。

環境は主観的であり、その前提条件は刺激を受け取る能力だ。ウクスキュルは、感覚の側面を「印象の世界(Merkwelt)」、反応の側面を「作用の世界(Wirkwelt)」と呼んでいる。ダニやクモ、ハエは人間が認識できる環境に住んでいるが、同じ環境に住んでいるわけではない。

自然

ウクスキュルの動物の環境に関する研究は、量子物理学や芸術のアヴァンギャルド(訳注10)とも共通する側面を持つ。これらの研究や表現は、統一された世界への信仰を揺るがした。人間の環境が多様な環境の一つに過ぎないのであれば、人間中心主義的な視点を捨てる必要がある。ジョルジョ・アガンベン(Giorgio Agamben(1942-))はこれを「自然の徹底的な非人間化」と呼んでいる。

多様な環境には、統一された空間も時間も存在しない。実験室での研究では、ダニが食物を摂取せず、自分の環境から完全に隔離されても18年以上生存できることが確認された。時間は彼らにほとんど影響を及ぼさず、彼らは時間の外で存在している。そのための適切な言葉すら存在しない。「睡眠に似た状態」や「待機時間」と表現するのは単なる人間中心主義に過ぎない。

人間と動物は、同じ時間や空間を共有していない。「作用は印象を消去する」とウクスキュルは述べた。外部からの刺激がなければ、ダニは他者との関係性を持たず、空間も存在しない。彼らには身体があるが、それを認識する感覚はない。ここで生物学は思考の限界に私たちを導く。空間と時間のカテゴリーが崩壊するからだ。これはカントの教え、空間と時間が主観的なものであるという主張を裏付けるものでもある。

生命の外には、絶対的な時間も空間も存在しない。時間と空間は主体の感知能力によって条件づけられるものである。ウクスキュルによれば、生命が存在しなければ、時間も空間も存在し得ない。それらは生命によって初めて生じるものであり、生きる主体に依存している。

風景

多様な環境の認識が人間中心主義の終焉を意味するのであれば、それでも人間中心主義自体が意識変容の大きな結果であることを確認する必要がある。この変化の始まりは、1336年4月26日に修士フランチェスコ・ペトラルカ(Francesco Petrarca(1304-1374))がモン・ヴァントゥに登頂したときにさかのぼる。当初、神に近づくための巡礼として計画された旅は、中世の自己像と神のイメージを根本的に揺るがすものとなった。

山頂からの眺めの中で、ペトラルカは神の業ではなく、目の前に広がる人間の業-田畑、道、村-を賞賛し始めた。ペトラルカは「新しい意志と古い意志の闘い」と表現した。それまで自然は「超越的な力、すなわち神としての存在」として崇拜されていた。しかし、この時点で神聖で畏怖を与える自然は人間の風景へと変化した。これは人間の自己認識と世界における地位を変えた。

神に対する地上のものへの賞賛は冒瀆とされた。ペトラルカ自身もショックを受け、その考えを中断したが、その思考はすでに現実のものとなっていた。この人間の意識の変化を表現するために、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe(1749-1832))は『親和力』の中で象徴的な場面を描いている。教会の墓地を整理し、墓石を教会の壁に寄せて配置するように指示するシャルロッテの行動がそれである。

シャルロッテはそれを「目や想像力が心地よく留まれる場所」となるように整理した。彼女の計画では、整理された墓地はイギリス風の新しい庭園の一部となるべきであった。庭園の「開放性」を通じて、これまで自然と社会に共通して存在していた秩序を問い直すことが意図されていた。新しい庭園に現れた新しい秩序の兆候に気づいたシャルロッテの夫エドゥアルトは、感傷的になりつつもシャルロッテの手を握り、「目には涙を浮かべていた」。

今日、物事の秩序はさらなる大きな変化に直面している。つい最近まで美しい風景であった場所は、破壊され、取り返しのつかない消滅にさらされている環境へと変わりつつある。一方で、新しい環境も誕生している。それは人工知能や自動運転車といった環境であり、それぞれ独自の感覚器官や特徴を持っている。これらすべてを含めて、人間の環境、動物の環境、物の環境が地球というシステムを形成していることが明らかになりつつある。

参考文献：

1. Giorgio Agamben, Das Offene. Der Mensch und das Tier, übers. v. Davide Giuriato, Frankfurt/M.: Suhrkamp 2003, S. 50.
2. Friedrich Nietzsche, Sämtliche Werke. Studienausgabe, hrsg. v. Giorgio Colli u. Mazzino Montinari. Bd. 5, Jenseits von Gut und Böse, Drittes Hauptstück : Das religiöse Leben. Aph. 62, München : dtv 1999, S. 81.
3. Giorgio Agamben, Das Offene. Der Mensch und das Tier, a. a. O., S. 49.
4. Jakob von Uexküll u. a., Streifziige durch die Unzwelten von Tieren und Menschen. Ein Bilderbuch unsichtbarer Welten [1934], Hamburg : Rowohlt 1956, S. 30.
5. Giorgio Agamben, Das Offene. Der Mensch und das Tier, a. a. O., S. 56.
6. Jakob von Uexküll u. a., Streifziige durch die Umwelten von Tieren und Menschen. Ein Bilderbuch unsichtbarer Welten. a. a. O., S. 27.
7. Ebd., S. 30.
8. Francesco Petrarca, Die Besteigung des Mont Vemoux [1336], übers. v. Kurt Steinmann, Stuttgart : Philipp Reclam jun. 2014, S. 21.
9. Friedrich Nietzsche, Sämtliche Werke. Studienausgabe, hrsg. v. Giorgio Colli u. Mazzino Montinari, Bd. 2, Menschliches. Allzumenschliches I, Drittes Hauptstück : Das religiöse Leben, Aph. I I I, München : dtv 1999, S. 113.
10. Johann Wolfgang von Goethe, Die Wahlverwandtschaften [1809], Hainburger Ausgabe in 14 Bänden, Bd. 6, München : dtv 1982, S. 254.
11. Ebd., S. 254.

理性の類似体 (ANALOGON RATIONIS)

啓蒙主義の再評価

18世紀の啓蒙主義^{訳注11)}、すなわち「理性の時代」は、再び大規模な批判の対象となっている。その核心は欧州中心主義的であり、植民地主義的だとされ、その普遍主義は「世界を支配しようとする白人男性の利益を隠すカモフラージュ」に過ぎなかったという非難が寄せられている。しかし、スーザン・ナイマン(Susan Neiman(1955-))は、啓蒙主義に対する無知が滑稽な歪曲や戯画化を生むと指摘し、現在こそ啓蒙の価値が必要であると述べている。それは特に「自分の属する部族を超えて考える」ために欠かせないものだと言っている。啓蒙主義は批判的反省を意味し、それがなければ思考は循環し、自閉的なものにとどまる。この過程で、美学が重要な役割を果たす。理性の類似体(analogon rationis)、つまり理性的な科学に対応する感覚的認識の学問として、美学は概念的思考を超え、全感覚的経験の総体に関する反省を開く。

批判的基準

否定することはできないが、建築に関する議論は批判的な境界を越えている。これは規範的な転換点と呼べるものである。気候危機の問題を背景に、新しい正統性と原理主義が生まれている。建築は啓蒙主義の根本から遠ざかり、「持続可能性」の名のもとに、何を考えるべきか、何を考えてはいけないかがますます指示される状況にある。その象徴が、2021年のヴェネツィア建築ビエンナーレのタイトル「How will we live together? (未来において私たちはどのように共に生きるのか)」です。このタイトルには、「意志」や「規範」を批判的基準とする姿勢が欠けている。

ビエンナーレのテーマに見られるのは、新しい規範主義の表れである。建築は、かつて克服されたはずの規範的な立場に逆戻りしている。しかし、真に批判的な未来志向は、「未来において私たちはどのように生きるべきか?」という問いから生まれるはずである。さらに言えば、「未来においてどのように生き、働き、愛するべきか?」という問いへと拡張されるべきである。それは、予測が現実を上回る可能性をも含む。

アドルノと近代の病理

テオドール・W・アドルノ(Theodor W. Adorno(1903-1969))によれば、近代が抱える問題は、その硬直した正統性にあり、「あまりにも単純な二項対立」、つまり理性と非理性、理性と感情、機能と装飾といったものの過度な分断にある。必要と無駄、有用と無目的、理性的と感情的といった対立項は、事物の中で厳密に分けられるものではなく、むしろ互いに絡み合っている。

新たな伝統の模索

蛇を前にした兎のように硬直し、すべてが未来に向けられている。エドムント・フッサール(Edmund Husserl(1859-1938))が『危機』の論文で科学者たちに批判的に問いかけた認識が失われている。

人間は「精神的な遺産を持つだけでなく、徹頭徹尾、歴史的・精神的な生成物である」とされる。ノルベルト・エリアス(Norbert Elias(1897-1990))によれば、人間社会だけでなく、人間そのものが「生成されたものであり、生成し続ける存在」である。ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin(1892-1940))の考えでは、すべての事物に「歴史的指標」が付随しており、それは人新世(アントロポゼン^{訳注12)})にも当てはまる。気候問題とそれ

に伴う倫理的な課題は歴史の外にあるものではなく、それらは「歴史全体——我々の歴史」の中でのみ考察され、解決され得る。ここで、特に美学と、芸術的アヴァンギャルドの観点から見ると、徹底した美的視点が特別な役割を果たすことになる。

これについては、バゾン・ブロック(1936-)が以前指摘している。アヴァンギャルドとは、「私たちに、ただ新しいという圧力の下で、慣習や伝統を新たに評価することを強いるもの」である。美的なものも知的なものも含めたアヴァンギャルドは、歴史を硬直状態から解放し、それを生きたものとして現代に引き戻す。そしてブロックはさらに次のように述べている。「アヴァンギャルドとは、私たちに伝統の確定されたとされる遺産を新しい方法で見ることを促し、つまり新しい伝統を築くことを意味する。」

伝統は、ブロックが述べたように、単純な直線的因果関係を介して歴史から直接現在に影響を及ぼすものではない。それに対し、アヴァンギャルドは、歴史的事実の構造、すなわち既知であると信じられている歴史的遺産に作用する。未来志向でのみ、古いものの中に新しいものを見出し、そこから現在を媒介として未来に新しい伝統の道筋を認識させるのである。

理性の類似体

美学、それも特にアヴァンギャルドとしての徹底的な表現は、認識と意識の媒体であり担い手である。認識は、アドルノが近代に求めたように、美学的手法が極限に達するところでのみ存在し、単なる媒介にとどまるものではない。あるいは、マンフレード・タフリ(Manfredo Tafuri(1935- 1994))の言葉を借りれば、「過剰こそが常に認識の担い手である」。

今日の意識には、徹底した美的かつ批判的な側面が欠けている。啓蒙主義の美学の創始者であるアレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテン(Alexander Gottlieb Baumgarten(1714- 1762))は、美学を「理性の類似物としての技術」(ars analogi rationis)あるいは合理的な科学に類似する芸術と呼んだ。美学は一方では芸術であり、他方では感覚的な認識の科学または媒体である。感覚こそが知性、ひいては批判的知性や理性への門戸なのである。

バウムガルテンはまた、芸術の認識能力を「低次」と呼び、哲学、物理学、数学のように概念や数値に基づく合理的認識とは区別した。小説、交響曲、オペラ、絵画、

劇作品、建築物、さらには風刺画や漫画などでは、認識は素材とその加工方法としての媒体に結びついており、切り離すことはできない。

ブロイセンの啓蒙思想家であるモーゼス・メンデルスゾーン(Moses Mendelssohn(1729- 1786))は、「多様性の一致」(Einhelligkeit des Mannigfaltigen)について述べた。感覚的認識は、「混ざり合った感覚」や動的な想像力の活動の中でしか成立しない。美学的な形式には、隠されたものを明らかにする役割がある。感覚を基盤とする認識を通じてのみ、美学は人間が感覚的な存在として自らを理解し、世界における自分の位置を明らかにする。

しかし、今日の過去への敵意と共に、思考の新たな閉鎖性が現れている。ポスト啓蒙主義では、思考の開放ではなく、むしろ自由空間の閉鎖が進行している。それには、ネイマンが指摘するように、自分たちの仲間だけのために書き、媒介の役割を回避する哲学者たちも責任がある。それゆえ、本書「グライターの宇宙」が書かれているのである。ブロックの新旧を織り交ぜるアプローチのように、思考を未来に向けて開いていくことが重要である。

参考文献:

1. Susan Neiman, 《Wo die Gerechtigkeit bedroht ist》, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 31. Mai 2021.
2. Ebd.
3. Theodor W. Adorno, 《Funktionalismus heute》, in: Ders. Gesammelte Schriften in 20(23) Bänden, Bd. 10.1. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1998. S. 378.
4. Edmund Husserl, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie [1936], hrsg. v. Elisabeth Ströker, Hamburg: Felix Meiner 2012, S. 76.
5. Norbert Elias, 《Über den Rückzug der Soziologen auf die Gegenwart》, in: Ders., Aufsätze und andere Schriften II. Frankfurt/M.: Suhrkamp 2006, S. 393.
6. Walter Benjamin, Das Passagen-Werk, Bd. I, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1983. S. 577.
7. Edmund Husserl, Die Krisis der europäischen Wissenschaften, a. a. O. S. 77.
8. Bazon Brock, Theoreme. Er lebte, liebte, lehrte und starb. Was hat er sich dabei gedacht?, hrsg. v. Marina Sawall. Köln: Buchhandlung Walther König 2017, S. 6.
9. Bazon Brock, Ästhetik gegen erzwungene Unmittelbarkeit. Die Goltzsucherbande. Schriften 1978- 1986. hrsg. v. Nicola von Velsen, Köln: DuMont 1986, S. 106.
10. Manfredo Tafuri, 《Les Bijoux indiscrets》, in: Five archilecls N. Y., hrsg. v. Manfredo Tafuri, Napoli: Officina edizioni 1981, s. 10.
11. Moses Mendelssohn zitiert nach: Heinz Paetzold, 《Rhetorik Kritik und Theorie der Künste in der philosophischen Ästhetik von Baumgarten bis Kant》, in: Kritische Theorie des Ornamentens. hrsg. v. Gérard Raulet u. a., Wien u. a.: Böhlau 1993, s. 33.
12. Ebd. S. 33.

訳註：

1. 一見すると矛盾しているように見えるが、よく考えると意味がある、あるいは真実を含んでいる表現や状況を言う。日本語では「逆説」とも言える。例を挙げると、「急がば回れ」：急いでいるなら、遠回りでも安全で確実な道を選ぶ方が結局早い、という意味で、表面的には矛盾しているように見える。
2. イタリアのフィレンツェにある「パラッツォ・ジョーニ(Palazzo Giugni)」という歴史的建造物があり、これが「ジョーネ宮殿」と表記されている。ルネサンス様式である。ジョーニ家はフィレンツェの貴族で、メディチ家と血のつながりのある名家であった。
3. 心理学では、人が持つ知識や経験に基づく認知の枠組みやパターンを意味する。例えば「レストラン」と聞いて「席を取る→メニューを見る→注文する→食べる→会計する」という一連の流れを思い浮かべるのは、レストランのスキーマを持っているからである。
4. エンタングルメントは量子もつれを意味する。量子力学における現象で、2つ以上の量子ビット(粒子)が、互いに強く関連しあい、片方の状態が決まるともう片方の状態も即座に決まるというものである。これが起きると、たとえ2つの粒子が非常に遠く離れていても、一方を測定した瞬間、もう一方の状態が決まるという特異な性質が現れる。
5. 米国の哲学者・科学者であるDonna Harawayにより提唱された概念である。人類中心主義を超えて、新しい形態の共生を模索する概念を提示している。人類がこれまでのように環境を支配し、搾取するのではなく、さまざまな生命と共に「困難」を共有し、解決策を見つけ出すことが求められている。
6. 顔の外見(輪郭、目、鼻、口などの各部位の形や配置)から人の内面や性格、さらには運命を推測しようとする理論や技法を言う。古代ギリシャのアリストテレスが、顔貌と性格の関係を述べたのが起源と云われる。中国でも「面相学」として独自に発展し、東アジアに広がった。

7. 文学や芸術での表現手法として、例えば童話や寓話で動物が話したり、考えたりするのは擬人主義である。イソップ童話でウサギとカメが人間のように話し、競争をする。また多くの宗教では神が人間の姿や感情(怒り、愛、嫉妬など)を持って描かれている。
8. 美学は「美とは何か」「美しいとはどういうことか」、「芸術や自然の美をどう評価・理解するかなど、美に関する本質や経験を哲学的に探究する学問である。
9. もともとは軍隊用語で、先制攻撃を行う小隊を意味した。芸術における意味では20世紀初頭、既成の価値観や様式にとられず、新たな表現方法を追求する芸術運動として広まった。これにより、ダダイズム、キュビズム、シュールレアリスム等の革新的な技術スタイルが誕生した。
10. 17世紀から18世紀にかけて欧州で広まった思想運動。理性、科学、個人の自由、進歩的な社会改革を重視した。この時代は伝統的な権威(例えば、教会や絶対王政など)に対する批判とともに理性による人間の理解と社会の改善が強調された。
11. 17世紀から18世紀にかけて欧州で広まった思想運動で「理性や『科学的思考』」を重視し、人間の自由、平等、進歩を目指す考え方。この運動は、伝統・権威・迷信に基づく考えを批判し、人間の理性によって社会をより良く変革できると考えていた。カントは「啓蒙とは、人間が自ら招いた未成年状態から脱する事である。」と述べている。この思想はアメリカの独立運動(1776年)やフランス革命(1789年)に大きな影響を与えた。
12. 人新世(じんしんせい/ひとしんせい)と訳される地質学用語で、人間の活動が地球の環境や気候、生態系に大きな影響を与えるようになった新しい地質時代をさす。「Anthro-(人間)」+「-zän(新しい時代)」というギリシャ語由来の合成語。2000年頃に大気化学者Paul Crutzenと生物学者Eugene Stoermerにより提案された。

好評発売中!

令和2年版 塗り床ハンドブック

日本塗り床工業会 編著

塗り床の
すべてを
この一冊に
凝縮!

監修 横山 裕
(東京科学大学 教授・工学博士)

主な改訂ポイント

- 広範な読者に塗り床をより分かりやすく。基礎知識を網羅!
- 用途、条件に合った塗り床の選定をサポート。選定目安一覧表を掲載!
- もちろん、施工者、技術者のための専門知識、情報も豊富に掲載!

初学者から専門家まで、幅広いニーズに応える内容充実の書



A5判 224頁
定価2,970円(税込み)

ご注文はFAX 03-3866-3858もしくは巻末ハガキで工文社まで